

100年後の諏訪 思い描いて

県社協まち歩きWS

「地域の宝」探し 未来の在り方考える



100年前の地図を広げ、まち歩き
での気付きを共有する参加者たち

県社会福祉協議会は13日、フ
ューチャー・デザイン・ワーク
ショップ(FDWS)「未来から
諏訪の暮らしを見つめるまち歩
き」を諏訪市内で開いた。県内
の福祉関係者や市民ら約40人が
参加。グループごとに市内をま
ち歩きして地域の宝を探した
り、100年後に「タイムトリ
ップ」して現在を俯瞰したりし
て、諏訪のまちづくりの展望や
未来に託すべきものを考えた。

(松本佳林)

FDWSは、福祉関係者らに先
を見据えて地域福祉のことを考え
る力を身に付けてもらおうと、2
022年度から毎年県内で開いて
いる。24年までの3年は松本市で、
今年は7月に伊那市で実施した。
この日のまち歩きは▽湯の脇・
大和▽石彫公園▽並木通り▽酒蔵
の4コース。参加者は道中で目
に留まった「お宝」をメモしなが

ら散策した。市駅前交流テラスす
わつチャオに到着後は、100年
前(大正時代)の地図に歩いたル
ートを書き込み、それぞれの発見
を記入。「温泉タンクは諏訪なら
では「ケヤキ並木は今も続くメイ
ンストリート」駅周辺は古い建物
と新しい建物が混在している」な
どと共有した。

後半は2125年を生きる視点
に立ち、未来の諏訪の姿を思い描
いて発表。「諏訪湖には生き物や
ワカサギがたくさんいる」「御柱祭
はずっと続いている」「子どもや移
住者が増え、みんなで仲良く過ご
している」などと想像して202
5年の今にメッセージを送り、将
来世代が満足する諏訪の在り方を
考えた。

2年前にUターンしたという諏
訪市小和田南の男性66は「地元
住民の目線と観光客の目線、両方
で新たな発見があった。未来を考
えたとき、自然の豊かさや人のつ
ながりなど『帰郷』を理想とする
考えが多く感じた」と振り返って
いた。